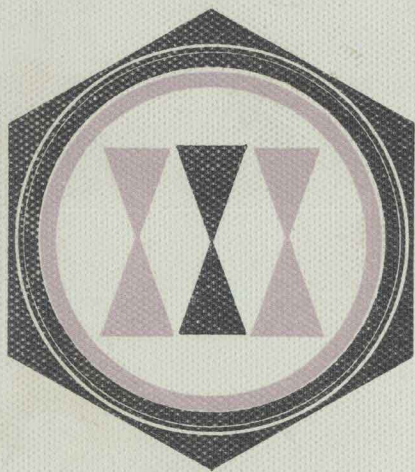


風流落語選

玉川一郎編



金園社

風流落語選

玉川一郎編



金園社

増補改訂 落語全集の決定版！

B 6 判 各冊 930余頁
特製美麗箱入 上製本 各冊

¥ 850 (〒100)

今村 信雄 編

上・中・下
全三巻

落語全集



★名人のはなし口をそっくり活かした速記によるから、いながらにして奇席の雰囲気味わうことができる。

★全三巻（上・中・下）とも九三〇頁余の膨大を誇り、古典落語の粹を集録名落語家の高座の高座写真も挿入。

愛読者サービス券

金園社の出版物を御愛読頂きましてありがとうございます。
平素の御愛顧の印として
愛読者サービス券3枚

を封書で御送付ごとに
高級3色ボールペン

1本を進呈いたします。

・本券の有効期間

昭和44年12月末まで



- ・金園社では実用百科叢書・自動車双書・辞典・図巻・将棋双書など400点余を刊行致しており、全点に愛読者サービス券を添付しております。
- ・出版目録御入用の方も下記へご請求ください。

・宛先

東京都台東区 東上野2の9
金園社愛読者サービス係

風流落語選



発行所
金園社

東京都台東区東上野二ノ九ノ六
振替東京九三三七八三番
電話（八三三）四〇二一（番代）

編者 玉川一郎
発行者 松木春吉
印刷所 文園堂印刷所

定価 二五〇円

昭和四十二年十一月二十日 印刷
昭和四十二年十二月一日 発行



目次

商店街お笑いセーブル編	七
かつぎや	九
寝床	一九
片棒	二〇
成田小僧	二二
素人芝居	二三
御神酒徳利	二六
あんま小僧	二八
火事息子	二九
藪医者	三一
ハテナの茶碗	三三
小言幸兵衛	三五
抜け雀	三七
百川	三九
S・Fミステリー編	四一
お化け長屋	四三



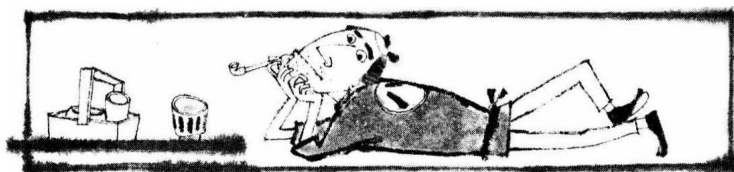


泳ぎの医者	五
田能久	五
王子の狐	五
寄席初中継	九
夏の医者	六
たちきり	六
あたま山	四
朝友	六
魂違い	七
搗屋の幽霊	〇
幽女買い	七
幽女	三
遊女の幽霊	七
空き家	五
締め込み	七
投身自殺	八
だくだく	八
だくだく	九
長屋の人気者活躍編	八
転宅	七



釜どろ	九〇
粗忽の釘	九二
堀の内	九三
師匠の模倣	九四
粗忽長屋	九六
蚊いくさ	九八
黄金の大黒	一〇〇
猫退治	一〇一
落語の誕生と生い立ち	一〇四
与太郎ムード横溢編	一〇九
こんにやく問答	一一一
後の祭	一一一
半分垢	一二二
代脈	一二三
近日息子	一二五
厄払い	一二七
石返し	一二八
鼻捻じ	一三〇
ろくろ首	一三一





高座の羽織	一三二
こっけい相撲	一三四
犬の眼	一三六
やかんなめ	一三八
高砂や	一三九
牛ほめ	一四一
お金と人情の世相編	一四三
芝浜	一四五
夢分限	一五七
稻荷の車	一五八
狸の釜	一六〇
おかめ団子	一六二
ツナギと前座	一六四
壺算用	一六六
三方一両損	一六七
黄金餅	一六九
富八	一七一
落語家さんの稼ぎ高	一七四



泣いて笑って恋愛編

宮戸川

一七九

身代り杵

一九〇

星野屋

一九一

清正公酒屋

一九四

菊江の仏壇

一九五

縮みあがり

一九八

写真の仇討

二〇〇

おかふい

二〇二

うしろ幕

二〇四

汲みたて

二〇五

薬違い

二〇七

磯の飽

二〇九

おとぼけ殿様とマゲモノ編

二一一

松引き

二一三

柳の馬場

二二四

首提灯

二二五

刀屋

二二七

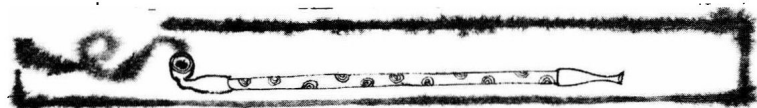
初音の鼓

二二九





そばの殿様	一一一
落語家の洋行	一一二
館林	一一四
猪退治	一一六
袈裟御前	一二七
廓の掟	一三九
落語に登場する代表的人物	一四〇
お好み新作編	一四五
駐車病	一四七
お妾税	一五四
数取り	一五八
歳暮まわし	一五九
嫁取り	一六〇
抜け裏	一六二
食堂風景	一六四
肝つぶし	一六六
妻の釣り	一六七
印鑑証明	一六九



編 七 笑いお街商店

かつぎや

寝床

片棒

成田小僧

素人芝居

御神酒徳利

あんま小僧

火事息子

やぶ医者

ハテナの茶碗

小言幸兵衛

抜け雀

百川



東西東西、ここもとお目にかけまするは、あまた数ある落し話名作より、ふるいにつけ、更に選び出だしましたお笑い商い往来にて、古今の名人上手の口跡こうせきをそのままに、移しましたる十二編。大商店の大旦那から番頭、女中、おつとただいまはお手伝いさんと申し上げる…小僧、飯炊き権助、はては勘当中の若旦那、大家に医者にお顧客くわくさまに至るまで、勢ぞろいいたしましてのお笑い大サービス。まずはごゆるりお楽しみを…。

かつぎや

権助に逆にかつがれて面喰う
ご幣かつぎの呉服屋のご主人



ものごとを氣にして縁起を祝うなどという方がござい
ますが、すべて世の中は目出度いことがあるから、目出度く
ないこともあるし、悲しいことがあるから、嬉しいことも
あるのですから、悟ってしまえば何でもないので。けれ
ども、どっちがいいかといえば、誰しも目出度い方を好む
のが人情でございますが、その中でも最も甚しい人があり
ます。これを俗にカツギヤと申します。

お古いお話に、ご出家が帳面を誂えたというのがござい
ます。

僧「帖面を一つこしらえて下さい」

帖面屋「へいへい、どういのが宜しうございますか」

僧「そうですな、なるたけ厚い方が宜しい。ついでに上書
きをひとつ頼みたい」

帖「畏りました。何んと書きますか」

僧「死人大入帖と書いて下さい」

帖「へい。なるほど、お寺様だけに死人大入帖。畏りまし
た」

帖面屋の主人が、筆太に「死人大入帖」と書いた。物見
高いところだから、大勢表に立って見物をしている中に一
人、

○「オウ、見ろや、この帖面屋はうめえなア。どうだい、うまく書いたじヤアねえか、まるで字が生きて駈け出しそうだ」

備「帖面屋さん、私はこの帖面を見合ませますよ」

帖「へエ、どういうわけで……。ほかの物と違ひまして、死人大入帖などというものは、ほかへ向け口がございせんが……」

備「イヤ、今ご見物の中に、生きてゐるようだ、駈け出しそうだ、といった人があります。死人に駈け出されては、私の方の稼業にならんから、それで見合わせる」

帖「モシモシ、あなた方、ほめて下さいますのはようございしますが、この帖面をお見合わせになるといふので、私の方で損をしなければなりません。困りましたね」

○「何ッ、ほめたんじヤアねエか、オウ坊さん、死人が生きて駈け出しちヤア稼業にならねエから帖面を見合わせるって……。何をいつてやがるんだ。マゴマゴしやがると叩き殺すぞ」

備「アッ、それで気が直りましたから買いましょう」

これも昔のお話でございますが、ここに呉服屋さんで、伊勢屋五兵衛さんという方がございます。これがご身代だ

が、すこぶるつきのカツギヤで、ゴヘエカツギというのはこれから始まつたそうで……

もつとも、大きいご身代の方ほど、すべてのことに大事をとりますから、自然と精進にもなるのだといひます。ある年のお正月、番頭さんはじめ、店の者がズーッと並んで、番「まず、明けましてお目出度うございます」

と、めいめい新年のご祝儀を申し述べます。

五「イヤ、お目出度うございます、一陽来復、初春となると、まことにいい心地のものだ」

番「さようでございます」

五「時に権助や」

権「ヒエー」

五「若水を汲んだか」

権「ヒヤア、若水でエますと……」

五「わからん男だな。手桶にシメ縄が張つてある。それを持つていつて、初の水を汲んできなさい」

権「それやア汲んだがす」

五「ナニ」

権「それやア汲んだがす」

五「ただ汲んだじヤアいけませんよ。その櫓だだ々だだを持ってい

って、井戸神様へ納めながら、新玉あらたまの年立ちかえる旦あした（あした）より、若やぎ水を汲み初めにけり、と唱えて水を汲んできなさい」

権「ヒエー……。何んだかこれは、わけの分んねエことだなア。家の旦那どんは物を氣にする性分だから、つまんねえことばかりいつてるんだ。やア、これやアいかねエ。井戸神様へいうことを忘れたぞ。何んだっけなア。エート、何の玉だったけなア。屁の玉じゃアねエ……。ああそうだ、眼の球だ、眼の球のでんぐりかえる旦より、末期の水を汲み初めにけり、か。ワザッとおひとだまです……。ははア橙々がふわふわして土左衛門のようだ……。旦那汲んでまいりやした」

五「ああ、汲んできたか、今、私のいった唱え方をしたかい？」

権「ヒエー、やりました」

五「忘れやしなかつたらうなア」

権「忘れませんとも」

五「もういっぺん、ここでやってごらんなさい」

権「幾度やっても同じこんだ」

五「そうでないよ。私しゃ氣になるからいつてごらんといい

うのだ」

権「そんだらやるべえかなア。エート、眼の球の……眼の球のでんぐりかえる旦より、末期の水を汲み初めにけり、とやりました。それで、ワザッとおヒトダマですが、と井戸の中へ橙々をぶちこんだら、土左衛門みたいようにふわふわ浮いていやした。でエエ土左衛門かね」

五「何故そんな縁起の悪いことをいうんだ。いやだなアこの男は。何かいうたびに、私に逆うようなことばかりいつている。お前のような人は、もう家へおけないから、出て行きなさい」

権「初春早々、人を減らすというのは縁起がよくねエ。来月五日まで待ってもらいてエものだ」

五「何んだい来月の五日とは、おかしく日をきるじゃアないか」

権「来月五日になると、ちょうど三十五日になるですがから、まんざら縁のねエこともねエだ」

五「くだらないことばかりいいなさんな、あきれ返った男だ」

番「オイオイ権助や、旦那様に逆らっちゃアいけません。とにかくお雑煮を祝いましょう」

五「それが……」

これから揃っておトソを祝い、お雑煮を食べはじめました。

番「モシモシ旦那様」

五「何だこ」

番「不思議なことがございます。私の頂きましたお喜餅かきもちの中から、お金が出ましてございます」

五「オヤオヤ、それはそれは……」

番「これで私がお祝い申します」

五「何んだこ」

番「餅の中から金が出たから、代々金持ちになるといふのは如何でございます」

五「なるほど、お前さんのいうことは嬉しいね。餅の中から金が出たから、代々金持ちになるとは面白い。ああいい心持ちになった。これですっかり気になったのが直りました」

權「ゴマすりの番頭め、餅の中から金が出て、代々金持ちになるとはうまくごまかしやアがったな。オレの考えなら、金の中から餅が出たら金持ちだろうが、餅の中から金が出たのだから、身上をもちかねる、とはどうだね」

五「また始めやがった。縁起の悪い奴だ。あっちへ行つてろ」

權助、とうとう追つばらわれてしまった。

五「定吉や」

定「ヘーイ」

五「お年玉の物を皆んなこっちへ持っておいで、残らず調べますから」

定「ヘーイ」

五「さあ、私が帖面をつける、いちいち読みあげな」

定「ヘーイ、……伊勢屋六兵衛さん」

五「ハイ、ハイ」

定「近江屋の源兵衛さん」

五「そういちいち屋号を丁寧にいっていると遅くなつていけない。伊勢屋六兵衛さんなら伊勢六さん、近江屋の源兵衛さんなら近源さんという具合にいいなさい」

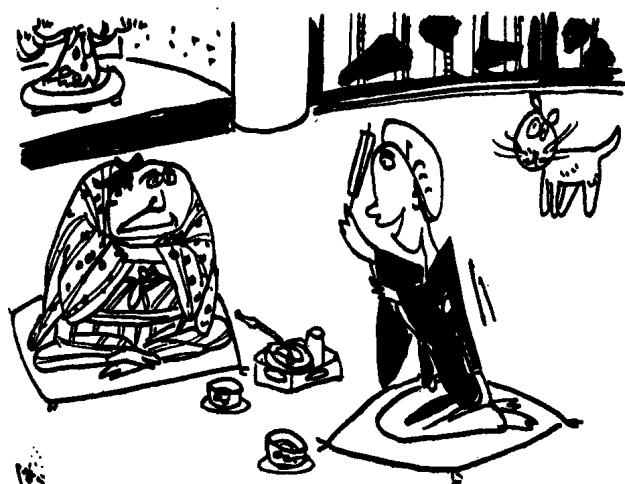
定「畏りました。……エエ、テンカンでございます」

五「何んだい、縁起が悪いな、テンカンとは」

定「天満屋の勘兵衛さんですから、テンカンで……」

五「そういうのは、本当にいいなさい」

定「あとがアブクでございます」



五「何だ、アブク。テンカンの後がアブクとはご丁寧だな」

定「それでも油屋の九兵衛さんですから、アブクでございます」

五「ろくなことはいわないな」

定「次がセキトウでございます」

五「何だ、セキトウとは」

定「石屋の藤兵衛さんで、セキトウ」

五「ばかばかしいことをいなさんな。縁起が悪い。初春早うろくなことをいわない。番頭、代っておくれ」

番「へエ、畏りました。定吉、お前まことによくないよ、さあさあ私が代わります。……エエ、申しあげます」

五「ハイ、ハイ」

番「鶴屋亀五郎さん」

五「縁起がいいな、鶴屋亀五郎さん。次は……」

番「松屋竹次郎さん」

五「なるほど、これで縁起が直りました。松屋竹次郎さんと、ハイハイ」

番「それからあとが、梅屋さんでございます」

五「いいなあ、これで松竹梅が揃った。まあこのくらいで」

止めておきましょう。……あつ妙な奴がきました。向うをみなさい。私の友達だが、早桶屋の四郎兵衛、あのくらい厭な奴はない。私がこの間逢つたから、福の神はどこへと聞いたら、お前のところから出てきた、といいやがつた。その後逢つたから、貧乏神はどこへ行くんだ、といったら、お前のところへこれから行くんだ、といいやがつた。本当に、あんな人の氣に逆う奴はありやアしない。初春早早あんな奴にこられて、また変なことをいわれて心持ちを悪くするのは厭だから、隠れていて逢わないから、番頭何んとかいつて帰しておくれ」

四「ウーイ、ああい心持ちだ。いやアこれはラントウさん」

番「いらつしゃいまし、相変らず面白い事をおっしゃる」

四「ダンカはどうしやした」

番「ダンカとは恐れ入りましたなア。ただいまおりません」

四「エエ、ダンカがない。おかくれになつたかい」

番「じようだんいっちゃア、いけません」

四「今、ここに坐っていたようだったが、姿が見えていないところを見ると、これは離魂病だな」

番「恐れ入りましたな」

五「番頭、私は出るよ……。おやおや、誰かと思ったら四郎兵衛さんか」

四「おやつ、いたね。まずお目出度う」

五「お目出度う存じます」

四「しかし、一休和尚のおっしゃるとおり、門松は冥土の旅の一里塚、目出度くもあり、目出度くもなし。まあ目出度いとは口にいうが、考えてみれば、おいおい寿命が縮まっていくのだね」

五「相変らず厭なことをおっしゃる。今日はどちらへ」

四「恵方詣りにいきました」

五「恵方詣りは結構だ。お多福弁天へでもお出掛けかな」

四「どういたしまして、私は今ね、無縁坂の方から因果寺へお詣りをして、こつちへ人魂のようにふわりふわりと飛んできました」

五「厭なことばかりおっしゃる。しかしねエ、お前さんと私とは竹馬の友だ」

四「さようさよう。お互いに、こうして一年でも長生きすると、古い友達が慕わしくなる。友達も大分なくなつてしまつてね。私も商売が商売だ、今度私にお前の寸法を取らせ